

【富山】「いぶし銀な存在」定年後も働くプラチナナース9人が多方面で活動-中嶋育美・あさひ総合病院院長補佐らに聞く◆Vol.1

2023年3月17日（金）配信 m3.com地域版

「決してピカピカではないけれど、個々の持ち味を生かしていぶし銀に輝く存在」――。下新川郡朝日町にある「あさひ総合病院」は10年以上前から定年後の看護師を雇用し、現在、9人の「プラチナナース」が多方面で活動している。前看護部長の中嶋育美氏は過去にプラチナナースの採用や配置を担い、現在は自身もプラチナナースとして働く。中嶋氏が「いぶし銀」と評するわけは。（2023年2月10日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



中嶋育美氏（右）と同僚看護師の柏紗織氏（本人提供）

富山湾東部、あいの風とやま鉄道・泊駅から北に歩いて15分の海近くに「あさひ総合病院」はある。車で東に10分ほど走れば新潟県糸魚川市に入り、「天下の険」として知られる絶壁地帯、親不知・子不知（おやしらず・こしらず）が続く。こういった立地から同院は長年、看護師不足に悩んできた。中嶋さんはこう話す。

「富山県の医療人材は昔から中央部の富山市に集まりやすい傾向がありました。東部の新川医療圏は人口が少ないうえ看護学校もないため、看護師もなかなか集まらなかったのです」

国の制度変更にも影響を受けたという。2006年に看護師1人が7人の入院患者を受け持つ「7対1看護」が導入、それまでの10対1から変更されたことで病院はより多くの看護師が必要になった。2015年には北陸新幹線が開業し、首都圏に出ていく人も増えた。同院の2010年ごろの看護師採用数は年に3人ほどで、応募がなく採用試験を行えない時期もあったという。

「看護師不足は全国的な現象ですが、少子高齢化がさらに進むだろうと想像されるなか、先を見据えた対策を打たなければなりません。そこで当院は10年以上前、定年後の看護師の雇用を始めました」

全国で60歳以上の看護師増「さらなる活躍を期待」

プラチナナース――。日本看護協会は2018年度から推進する「看護師の働き方改革」として、定年後も働く看護師に着目してこう呼んでいる。同協会によると、2020年における看護師のおよそ9人に1人は60歳以上であり、「プラチナナースは看護マンパワーを支える重要なメンバー。今後さらなる活躍が期待されている」とする。

同院もプラチナナースの雇用を続けており、現在、60～72歳の9人が働く。病棟や外来のほか、「豊富なキャリアを生かせる」として従来はなかった役割も担う。入退院支援センターと総合相談窓口での仕事はその代表例だ。入退院支援センターでは予定入院の患者や家族を事前に面談したり、患者の退院前にその人の情報を集約し、留意点があ

れば地域連携室に伝えたりしている。一方の総合相談窓口は患者や家族のさまざまな質問に対応し、内容に応じて専門部署を紹介する。

「ブラチナナースは院内の仕組みを熟知しており、どんな場合にどんな部署や人につながればよいかよく分かっています。自分で処理できるキャパシティも広いので、活躍しやすい部署だと思います」

中嶋さんは2015年度から2021年度まで同院の看護部長を務め、ブラチナナースの採用や配置を担った。入院支援センターと総合相談窓口は、「病院の利便性向上とブラチナナース活躍の場創出を兼ねる部署」として、2019年の病棟再編後ほどなくして開設した。中嶋さんも立ち上げに携わった。

ブラチナナースは部署の新設だけでなく、病院の組織改革にも貢献したという。同院は2019年、富山県が将来人口推計をもとに効率的な医療のあり方を示した「地域医療構想」に沿い、病棟を再編した。199床を109床に減らし、53床を地域包括ケア病棟に転換。急性期医療の縮小と回復期医療の拡充を図り、45%という県内自治体で最も高い高齢化率を考慮して介護機能も増やした。病棟転換によって空いたスペースを活用し、在宅介護支援センター、通所リハビリテーション、認知症やせん妄状態の入院患者向けの院内デイサービスなどを設置した。

ブラチナナースは通所リハと院内デイにも配置されており、リハビリスタッフや認知症認定看護師などと協力して患者をサポートしている。「介護機能を増やす組織改革にもブラチナナースは貢献してくれたのです」

66歳の中嶋さん自身もブラチナナースとして週に3日、働いている。同院は公営であるため、朝日町の条例で定められた3年間の定年延長制度を利用して63歳まで正職員として働き、以降は非常勤の会計年度任用職員として在籍。ブラチナナースとして2年間、看護部長を継続して務め、2022年度からは院長補佐として院長やスタッフの相談に応じたり、地域で生活指導を行ったりしている。

「ブラチナナースの存在はまさにいぶし銀。ピカピカに光っているわけではありませんが、個々に自分の経験や持ち味を生かしてしぶく輝いています。現役の看護師に比べて体力は落ちるものの、患者さんやスタッフの話をよく聞き、いろいろなことに気づく。それが患者さんへのサービス向上だけでなく業務効率化にもつながっています」

看護師の柏紗織さんはこれまで4年ほど、病棟や外来でブラチナナースと共に働いてきた。「定年後も患者さんに関わり続けられる仕組みがあるのはうれしい。大先輩のブラチナナースには学ぶべきことが多く、同僚や相談相手としてとても頼りになります」

同院の場合、ブラチナナースの給料は看護師としての経験年数に応じて決められており、職位によっては現役時代の7割ほどの人もいるという。

◆中嶋 育美（なかしま・いくみ）氏

1978年富山県立総合衛生学院第一看護学科卒。国立富山病院を経て、1981年あさひ総合病院勤務。2015年から看護部長を務め、2022年からはブラチナナースとして地域で生活指導などを行う。

◆柏 紗織（かしわ・さおり）氏

2015年富山医療福祉専門学校看護学科卒業後、あさひ総合病院に勤務。病棟勤務を経て2021年から眼科外来に在籍。ブラチナナースと共に働く。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】



